

日中対照文法を媒介とした初級中国語教育の試み ～ “是” 構文・形容詞述語文・動詞述語文について～

永 井 鉄 郎

はじめに

対照言語学は、その研究成果をいかに発展し活用するかという点において、1) 言語普遍性を探究するという一般言語学的視点、2) 第二言語習得に有効な視座を与えるという応用言語学的視点、これら二つに大別することができる。

このうち、第二言語習得、換言すれば外国語教育に対照研究の成果を取り入れることに関しては、大学における外国語科目のように、学習者の母語が統一されている環境であれば十分に効果が期待できるが、現時点でそのような有効な教授法というのはいまだに探究されていないように思う。理由としては、

- 1) 一般言語学的視点の対照研究の成果の中から、いかに応用言語学的視点、つまり外国語教育に活用できるような項目を抽出するか、その作業がなかなか行われない
- 2) ここ数年の大学生の外国語科目履修者の中に、文法用語をほとんど理解しない者が増え始め、英語を媒介とした他言語の解釈や、母語である日本語に対する内省ができない学習者が増えている¹⁾

の2点が挙げられる。つまり、特に初級中国語教育において、日中対照研究の成果の中で学習者にとって（研究者にとってではなく）有効なものをいかに教授法とし

て採用するかが議論されていないということが言える。そして、中国語に関して文法用語を使つての説明が理解できないばかりか、英語や日本語の文法を引き合いに出しても英文法や日本語文法を知らないために要領を得ない、そういう学習者が大学の教室に出現してきた、ということである。

もちろん、大学が義務教育でない以上、研究の基礎に必要な学力さえ持たない学習者に配慮する必要はない、という意見もあるだろう。しかし、そういった学習者がただ単に「中国語は難しい」「難しいからわからない」「だから勉強しない」という悪循環に陥っていく現状を袖手傍観しては、外国語嫌いを克服できぬまま、そしてこの国際交流の華やかなる現代において外国語学習の楽しみも知らぬままに大学を通過して社会に送り出すことになってしまう。そのような若年層が将来さらに増えていけば、グローバル化した日本社会や人手不足が深刻な労働市場にいかなる影響を及ぼすかは自明のことであろう²⁾。

本稿は、日中対照研究の成果そのものを日本人学習者に対する中国語教育に応用する、というよりは、中国語学習を通して母語である日本語にも関心を持たせ、そして中国語という外国語にも同じく関心を持たせるには教室活動をいかにすべきかを検討してみたものである。これにより、現在の大学生の中で増加しつつある、言語全体への（外国語はおろか母語である日本語についても）関心が著しく低い学習者に対してであっても、いかに「言葉の面白さ」「文法の興味深さ」「外国語学習の楽しさ」を見出しながら中国語学習に取り組ませるかを探究してみた試みである。以下、初級中国語の中でも特に初心者が最初に学ぶ文法項目である“是”構文、形容詞述語文、動詞述語文について、主に教室活動での事例を中心に述べていこうと思う。

1. “是” 構文

ほとんどの初級中国語教科書では、最初の課に、繫詞“是”を用いた構文が提出されるが、それに付随して代詞（人称代名詞・指示代名詞）が提出される。この場

合、要するに「AはBである」「AはBではない」「AはBですか」を重要文型として習得してもらえばよいわけであるから、

(1) A是B。

A不是B。

A是B吗？

の三項目を“是”構文のまとめとする。

しかし、実はこれよりも代名詞の方が、学習者にとっては把握しづらい物であるようだ。多くの教科書では指示代名詞として“这”(これ)・“那”(あれ)・“哪”(どれ)を提出しているだけであるが、このうち“哪”は量詞か数詞を後置しないと使えない物である。したがって、教科書の中には“这, 这个”“那, 那个”“哪, 哪个”と、“哪”の用法に合わせて量詞“个”が付着した形式を併記している物が多い。また、実際には“哪”単独では用いないことから、「どれ」にあたる部分に“哪个”のみを提示し、“哪”の方を提示していない教科書もある³⁾。いずれの教科書を用いるにせよ、実際に用いるのは“哪个”の方のみであることは、学習者に注意を促しておく必要はあるだろう。

その場合、“哪”のみ他の指示代名詞とは用法が異なることを、日本語をたとえに出して次のように説明することになっている。

(2) 「これは…です」「あれは…です」という日本語は可能だが、「どれは…ですか」とは言えない。言うなら「どれが…ですか」でなければならない。

疑問詞は、日本語でも中国語でもやや特殊な存在なのだ。

もちろん、ここで例示した「…は…です」の「は」は提題であり、主格を表す助詞ではない。また、日本語において疑問を表す代名詞は提題の形式を採ることができないことと、中国語において“哪”が単独で用いることができないこととは別問

題である。そして、大学一年生の初級中国語受講者の中に、主格を表す格助詞と提題を表すとりたて助詞との違いを理解している者が存在する可能性は極めて低い。しかし、学習者の母語である日本語の疑問代名詞も一般の代名詞とは異なる振る舞いをする、ということを経験することによって、今後理解しにくい中国語の文法項目に遭遇しても、たとえば日本語にも同じような現象はないだろうか、と自ら探る場合のヒントとして提示しているのである。本稿における「日中対照文法を媒介とした初級中国語教育の試み」とは、このような事例を指す。

この疑問代名詞の振る舞いについては、さらに、英語を始めヨーロッパ系の言語では、疑問詞を通常文頭に置かねばならないことを想起するような、言語に関して敏感な学習者がいれば申し分ないところであるが、学習者の混乱を招くことも考えられるので、これについては教師側からは提示しないことにしている。

さて、この“是”構文に限らず中国語の疑問詞疑問文は、疑問を表す語気助詞“吗”と共起しない。したがって先の(1)のまとめのままであると、“A是B吗?”のABいずれかが疑問詞の文であっても“吗”を文末に置くと思ひこむ学習者が出てくる。そこで、次のような付帯事項を加える。

- (3) 日本語が「何」や「誰」と「～か?」を共に使えるのとは異なり、中国語は疑問の印は一つでよい。疑問詞を使うか、“吗”を使うか、どちらか一つのみ。二つは必要ない。

「印」とは言語学の用語で言えば「マーカ」に相当するが、受講者に対して印象づけやすくするため、あえて日常的な語彙を選んだ。

これに関しては、述語部分に“什么”が来る場合に、さらに“吗”を付加すると口調として奇異な感じがするせいか、“这是什么吗?”のような誤答は少ないように見受けられる。それ以外の場合、たとえば“他是谁?”などは“吗”を文末に加えてしまう誤答が増えるようである。

なお、中国語にはこの繫詞“是”を用いない名詞述語文があり、多くの中国語教

科書は月日・曜日の項目にこの現象が初めて提示されているようだ。これに関しては、授業内では最初に何も触れず、“今天十月十号。”“今天星期一。”などの例文を、日本語訳をした後にリピートさせるだけにとどめることにしている。そしてその後で、「この例文を見て、どこか疑問に思った人はいないか」と受講者全体に問いかける。しばらく考えさせた後、ここで“是”が使われていないことに触れ、その理由を説明する。一度例文について考えさせることで、単に授業を受け身で聞くだけでなく、自らが言語現象について疑問を持つ、という習慣を付けさせるためである。

2. 形容詞述語文

中国語の形容詞述語文は「主語＋形容詞」でよく、英語と異なり動詞を必要としない。タイ語・ベトナム語などにも同じ現象があるが、英語で be 動詞を使うことに慣れてきた学習者にとってはかなり困難に感じることのようにである。つまり、「主語＋“是”＋形容詞」のような誤答が跡を絶たない。これについて注意を喚起するために、これまで次のような方法を採用したことがある。

- (1) 日本語・英語・中国語で、述語の表し方を比較して提示する。すなわち、
日本語の場合…名詞＋ダ、形容詞、動詞
英語の場合…動詞
中国語の場合…名詞、形容詞、動詞⁴⁾
- (2) 形容詞述語文の例文を日本語訳の後、リピートして覚えさせる。その後、この例文で何か疑問に思うことはないか、と受講者全体に問う。
- (3) 形容詞述語文の例文を日本語訳の後、リピートして覚えさせる。その後、日本語訳を英訳させ、中国語文との比較をさせる。

ここで、(1)の方法に関しては7～8年前の初級中国語受講者には難なく理解してもらえた記憶があるが、その後は使用していない。「主語」はまだよいとして

も、「述語」となると意味が通じない、という受講者がこの数年急増しているので、この方法は言語に相当関心の高い受講者が集まったクラスでなければ無理であろう。

(2)の方法は、少人数のクラスで採用したことがある。8人ほどの初級クラス(この場合は大学の授業ではなく、高校3年生の授業であったが)でこの問いかけをしたところ、「先生、“是”がない!」と大声で発言した受講者がおり、英語との相違に気づいたようである。教師側で全てを説明してしまうよりも、例文を見て自ら発見させるという方法が功を奏した。

(3)の方法は、比較的英語学習が盛んで、1年生の間は英会話が必修科目になっている、ある大学の初級クラスにおいて実行した。「私は忙しい」を英訳するよう指示すると“I am busy.”とほとんどの受講者が口にする。そこで、英語では“am”が必要だが、中国語では動詞は不要である、“我是忙。”とは言わない、と改めて確認するのであるが、受講者の反応は「わかりやすい例だ」というのがあった一方で、「誤答の例文を言われるとかえって間違えそうだ」という意見もあった。

ここではいずれも英語を意識した説明となっているが、(1)にさらに例文を加え、日本語を介した説明というのも下記のとおり第4案として考えてみたことがある。

(4) 日本語の場合、「名詞+ダ」は述語になりうるが、「形容詞+ダ」とはならない(私は学生だ。／*私はいそがしいだ。)。同様に中国語も、“是”+形容詞は不可能である。

これは参考でクラス便りのようなプリントとして配布したことはあるが、授業中では採用していない。それは、まず「形容詞+ダ」は不可であっても「形容詞+デス」が使えるために、覚え違いをされるとこの例を出した意味がなくなること、そして日本語の形容詞の見分け方自体が万全でない学習者も存在する(「い」がつけば形容詞である、とだけ覚えているために「きれい」までも形容動詞でなく形容詞

であると思ってしまう学習者などがいる) ためである。そのような学習者は「いそがしいだ」は不可能でも「きれいだ」は可能ではないか、という疑問に陥ってしまう危険がある。

このほか、これは日中対照とは関係がないが、形容詞述語文については、副詞“很”の問題も提示しなければならない。一部の教科書では、形容詞述語文を、初級レベルで頻繁に使われる性質形容詞に限定し、「肯定文は主語＋“很”＋形容詞、否定文は主語＋“不”＋形容詞」としていることが多くなっている⁵⁾。ここではこの程度副詞に着目し、以下のように提示する。

- (5) 形容詞を使う場合は、「主語＋副詞＋形容詞 (～は～い。)」⁶⁾ という形で用いる。何らかの副詞は必ず入れる。特に“很”は「とても」の意味がなくとも必要である。程度をさらに強調したければ、“真”“非常”などを使う。否定であれば副詞は“不”を入れる。疑問文であれば「主語＋形容詞＋“吗”」で、副詞は必要ない⁷⁾。

つまり、通常形容詞単独では用いず、肯定にしろ否定にしろ、副詞はひとつ必要だ、という説明である。もちろん、“很”は強勢を置けば「とても」という程度を表すわけであるが、実際に初級の中国語学習者が、四声を正確に読むだけで精一杯のところ、さらに強勢の置き方を提示しても混乱することが充分予想されるので、ここでは程度の表し方として他の程度副詞 (“真” “非常”) を提示することにして

3. 動詞述語文

ここでは動詞述語文のうち、目的語を採る文、つまり S＋V＋O の文について述べる。これに関しては、英語と全く同じ語順であり、学習者側でそう大きな混乱は起きない、と予想される。事実、3～4年前までは教室で S＋V＋O という説明で、

または主語＋動詞＋目的語という説明で十分学習者に通じていたように思うのだが、最近では試験の答案などを見ると、そうと断言できないようなことが、散見されるようになった。つまり、動詞と目的語（日本語でいえば補語の格と動詞）との関係に対する理解が苦手な学習者が増えているのである。

具体的に言うと、「動詞」「目的語」などの用語がわからない学習者のために、S＋V＋Oについて、「～は～を～する」という説明を採用したとする。ところが、日本語で補語と動詞との関係は表層格で言えばヲ格、二格、デ格、ガ格など様々な形で現れても、中国語では動詞＋目的語という結びつきでしか現れない、という例は多い。このうち、ヲ格が中国語で動詞＋目的語の構造になることは理解できたとしても、その他の格については理解できず、日本語から中国語に訳すことができない、という学習者が増えつつある。つまり、ヲ格＋動詞＝動詞＋目的語という一対一対応の処理しかできないため、

- | | |
|-----------------------|--------|
| (1) 私はご飯を食べる。 | 我吃饭。 |
| (2) 私(に)は時間がある。 | 我有时间。 |
| (3) 私は勉強が好きだ。 | 我喜欢学习。 |
| (4) 私は学校へ行く。／私は学校に行く。 | 我去学校。 |

などのような日本語文があった場合、(1)のような中国語のS＋V＋O文は困難無く覚えるようであるが、(2)～(4)になると補語がヲ格を採らないために中国語のS＋V＋O文とは即座に結びつけられない、ということである⁸⁾。

個別に見ていくと、(2)では補語がガ格であるために、「時間が」を中国語で目的語の位置に置くことを困難に感じ、さらには、もしも日本語文で「私は」が「私には」となっていた場合には二格を中国語にどう訳すのかという二重の混乱に陥る学習者もいるようだ⁹⁾。(3)も同様に、「～ハ～ガ」という日本語文に引きずられ、中国語のS＋V＋O文と結びつけられず、また初級学習者によく見受けられる「好き」を“喜欢”でなく“好”と思いこんでしまう誤解とあいまって、“我是学习好”という誤答は意外と多い。また、学習が進んで主述述語文を授業で提示された際には、日本語訳が同じ「～ハ～ガ」となるので、これと混同することも予想される。

本来ならば、これら日本語で多様な格として表層に現れるものに関しても、英語教育を中学・高校で受けていれば、“like” “have” に目的語を付けるときと変わらない、という連想が働くはずであり、英文和訳および和文英訳を通して日本語と他言語との間で格関係のみならず様々な相違があることを学んでいるはずなのだが、昨今は英文法の確たる知識を持たぬままに大学に進学してしまうケースが増えたのだろう。

こういった格に関する把握力の欠如については（というより、目的語というと日本語の「ヲ」としか対応させることができない学習者については）、現時点では次の三項目の説明を考えている。

- (5) “有” や “喜欢” について特に意識させず、口頭練習によって記憶させる。
- (6) “有” や “喜欢” については、「～に～がある」「～は～が好きだ」よりも「～は～を持っている」「～は～が好きだ（好む）」という日本語訳で覚えさせる。「自然な日本語」か、「中国語訳しやすい日本語」か、よく観察させ、外国語学習に自信のない人は、後者で覚えることを推奨する。
- (7) 中国語の S + V + O 文について、O が日本語のヲ格以外で現れる動詞をグループごとに提示する。
たとえば、
ガ…有（…ガある）・喜欢（…ガ好きだ）・要（…ガ欲しい）・懂（…ガ分かる）
ニ…去（…ニ行く）・给（…ニあげる）・告诉（…ニ告げる） など。

ただ、(7) に関しては、単純にグループ分けしてしまうとそのみに固執して融通が利かなくなる学習者も予想され（たとえば「～が欲しい」と「～を欲しい」は中国語では同じでよいのか、などを考えて混乱する）、未だに教室で提示したことはない。

現時点で考えたことは以上であるが、このほか、動詞述語文には様々な要素も考えなくてはならない。たとえば、(7)にしたがって説明した場合、あまり日本語の格を強調していくと、動詞が三項以上の格を採る場合や、動詞とはかかわらない任意格についての混乱も予想される。つまり、二重目的語の「～ニ～ヲ」はどうなるのか、「5時に」の「二」を中国語でどう表現するのか、これらの「二」は同じ表現になるのか、という疑問が学習者の中には生じるであろう。これがすなわち、言語研究者の考える対照研究が、そのまま学習者に理解されはしないという例である。日本語文法研究者でないかぎり、動詞述語の必須格と任意格との区別はつかない。たとえば「火曜日に彼にそのことを告げた」などという日本語のように、補語の格が増えた場合には、これらの「二」をどう表すのか、両者の「二」に違いはあるのか、ということについてさらに混乱してしまうことが予想される。これに介詞構造が加わって、「～デ」「～ト」の句が入った文を中国語に訳すとなれば、どういふことになるのであろうか。「単語をどのように並べると正解なのかわからない」と言う学習者は、正にこのようにして挫折していくのであろう。これらに関しては今後検討していきたい。

4. まとめと今後の課題

以上、随所で述べてきたように、昨今は大学生といえども、事前に養ってこべき言語感覚・言語知識が備わっていない学習者が増えている。つまり、確固たる英文法の知識の土台の上に英文和訳（さらには和文英訳）を通して日英間の表現・文法の相違を知ったり、読書によって日本語の様々な文体に触れたりするような訓練を、どう考えても行ってこなかったとしか思えない学習者に遭遇することが多くなっている¹⁰⁾。そういった大学生の国語力の低下はマークス（2006）ほか、新聞記事の特集などでの指摘は枚挙に暇がない^{11) 12)}。

教師側が理想像とする大学生像に合わせた授業をしていてはもはや立ちゆかなくなり、かといって低下した学力に合わせた授業をしてしまえば大学という権威には

そぐわない。知的レベルの高い学習者にも満足してもらい、同時にそうでない学習者には外国語学習を通して勉強の意義や楽しさを知ってもらい、そのような相反する目的を共に達成するためには、やはり自らの母語である日本語に対する内省をさせ、国語への意識を呼び起こし、そこから外国語との比較対照という興味へつなげていく、その方法しかないのではないか。そう私自身は考えている¹³⁾。

幸いなことに、上記のように授業を行ったクラスの受講者からは「説明がわかりやすかった」「初めて中国語を学ぶのがこの授業でよかった」という反応が多く挙がっている。今後、大学生の知的レベルの向上、そして中国語力の向上について、さらに対策を考えていきたい。

注

- 1) 平成19年度の中国語初級授業2クラスの受講者に対し、4月（第1回授業時）・7月（期末試験時）および10月（中間試験時）の計3回、簡単な日本語力調査およびアンケートを行ったことがある（いずれも記名式）。

4月の調査とは、漢字の書き取りのほか、次のようなものを問うた。

「次の文を文節に区切り、また、名詞・形容詞・動詞・副詞・形容動詞・助詞にあたる語を抜き出さない。

（問）穏やかな広い海の上を白いかもめがゆっくりと飛んでいく。」

結果は、

クラスA（46名）

文節全問正解者…15名 品詞全問正解者…7名

文節白紙解答者…10名 品詞白紙解答者…10名

クラスB（59名）

文節全問正解者…13名 品詞全問正解者…8名

文節白紙解答者…16名 品詞白紙解答者…20名

となり、全問正解者より白紙解答者の方が多かった場合がほとんどであった。つまり、品詞という概念が理解できていない受講者がそれだけ存在するということになる。

7月のアンケートは、授業で何が難しいかという問で、「単語をどう並べると正解なのかわからない」と回答した受講者が、上記クラスA（46名）で7名、クラスB（56名）で6名いた。なお、この7月の時点では、まだ“是”構文・動詞述語文・連動文・数詞・量詞と若干の助動詞を教えただけの段階で、当該クラスではまだ形容詞述語文も介詞構造も教えていない。

10月のアンケートでは、次のような設問を掲げた。

「文法用語の説明を板書された場合、あなたにとって最も理解しやすいものは次のうちどれですか（回答は一つのみ）。

1. S、V、Oなどの記号
2. 主語、動詞、目的語などの品詞名
3. 「～は」、「～を」、「～する」などの具体名
4. どれでもわかる
5. どれでもわからない

この結果は以下のとおりである。

クラスA（44名）…1：5名、2：10名、3：16名、4：6名、5：1名

クラスB（50名）…1：15名、2：10名、3：14名、4：5名、5：1名

- 合計すると、「～は」「～を」というような、文法用語を一切使わない文法説明を欲している受講者が最も多いことになる。
- 2) 八木 (2007) では、ある会社で作業中の軽率なミスが増えたことに危機感を抱き、新入社員に計算ドリルや漢字ドリルをやらせた結果、ミスが減り始めた、という話を紹介している。学校時代に集中して学習・記憶するという訓練を経っていないとどうなるかを物語っている事例である。
 - 3) たとえば『漢語鍛錬』(同学社)。
 - 4) 寺村 (1982) で、品詞と述語との関係について述べた箇所を参考にした。なお、寺村 (1982) では、形容動詞という品詞を立てず、名詞的形容詞、あるいは名容詞としている。ただ、本稿においては中国語教育という場で日本語の形容動詞を認めるか否かに立ち入るのは適切でないと考え、また教室活動においても、中国語の品詞分類になく日本語には存在する「形容動詞」については一切触れずに済ませた。
 - 5) たとえば『始めよう！中国語』(白水社)。
 - 6) ここで「～い」と表示するのは、品詞に暗い受講者に日本語の形容詞の基本形を認識させるためである。
 - 7) 相原・石田・戸沼 (1996) では、「性質形容詞は事物の属性を表す、そなわちその物がどういう性質を備えたものかということを表すだけですから、これだけでは文を構成するのに必要な話し手の心的態度が欠けてしまいます。そこで程度副詞を使って文を成立させるのです」とあるが、「心的態度」という用語は学習者に提示しても理解されない可能性が高く、この説明には加えていない。
 - 8) (3) の場合、日本語では述語が動詞ではないが、中国語の動詞述語文を中心としてこの例を出した。
 - 9) 試験の答案でよく見かける誤答で、たとえば「テーブルの上に一冊の辞書がある」という文を中国語訳させると、「には」の「二」に惑わされ、“桌子上有一本词典。”という正解に至らず、“一本词典在桌子上。”としてしまう場合が多々ある。「～二」という場所を表す語を主語の位置に置くことに理解が至らない学習者が多い、ということである。
 - 10) 茂木 (2004) や鳥飼 (2006) の指摘では、「日本の英語教育は文法に偏っていて、会話を教えていない」という、いかにも文法と会話が二律背反的なものであり、かつ英語コミュニケーションのためには文法は不要であるかのような、大いなる誤解が中学・高校の英語教育界に罷り通っているということである。これも文法嫌い（もしくは文法知らず）を生み出している原因なのかもしれない。
 - 11) この筆者は、著書の中で、大学の授業で受講者に作文を書かせて採点するという作業を続け、次のように講評している。
 …文章力のなさというのは、作文を書いた時にメールのように箇条書きでしか書けない学生が増えてきていることにははっきりと表れている。漢字の間違ひはいうまでもない。それから話し言葉と書き言葉の違いも知らない。「すげえ」「やっぱ」などの言葉を作文の中で使う学生のほうがふつうである。
 …
 - 12) 新聞記事の特集で大学生の国語力低下を扱ったものは、たとえば『毎日新聞』「大学淘汰」(平成18・2006年6月5日および12月5日)、『産経新聞』「大丈夫か日本語」(平成19・2007年5月1日) など。
 - 13) この点では、外国語学習の前にまず日本語を鍛えようという、三森 (2003) の主張に大いに触発された。また、日本語の文法と比較対照してその相違点にポイントを置いて学習すれば面白く勉強できるという遠藤 (1990) の指摘もある。

参考文献

- 相原茂・石田知子・戸沼市子 (1996) 『Why?にこたえるはじめての中国語の文法書』(同学社)
- 遠藤紹徳 (1990) 『間違いだらけの中国語学習』(徳間書店)
- 鳥飼玖美子 (2006) 『危うし！ 小学校英語』(文藝春秋)
- 三森ゆりか (2003) 『外国語を身につけるための日本語レッスン』(白水社)
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』(くろしお出版)
- 茂木弘道 (2004) 『文科省が英語を壊す』(中央公論新社)
- マークス寿子 (2006) 『日本はなぜここまで壊れたのか』(草思社)
- 八木秀次 (2007) 『公教育再生』(PHP研究所)
- 林祥楣 (1984) 『汉语知识讲话 代词』(上海教育出版社)

A Casestudy on Elementary Chinese Teaching through the Contrastive Grammar between Japanese and Chinese

～ On “*shi*” Sentences, Adjective Sentences and Verb Sentences